2011年04月01日　（金曜日）　中日新聞　朝刊　29ページ

備える

その99「震災報道」

記者たちの使命と現場

東日本大震災を取材して

「3・11」東日本大震災は、圧倒的な現場の多さで記者たちに迫ってきた。津波で風景が根こそぎ変わってしまった町や村で、社会部記者たちはしばしば立ち尽くした。懸命に立ち直ろうとする人々。だがその気持ちや表情、書くべき必要な事柄は日々少しずつ変わっていった。それを記者が勝手に理解して整理してはいけない。そうすると被災者からどんどん遠ざかってしまう。被災者とあくまで同じ歩調で歩まなくてはならない。震災報道は始まったばかりだ。

無事を信じる家族

丸田稔之

地震から三時間後、宮城県名取市閖上（ゆりあげ）の上空を旋回する取材用の飛行機に乗っていた。

津波で眼下の町が水没し、残った家も炎に包まれていく。「とてつもない数の死者が出る」と直感した。

二日後、閖上に地上から入ると、惨状にひるんだ。つぶれた車の中で息絶えた人。会社の一階窓から上半身を投げ出した男性。救助隊は人命の捜索を優先し、遺体の収容にさえ手が回らない。

身元が分からない遺体の存在を知らせる目印の棒が、がれきの山に次々と立てられていく。一人一人の遺体を尊厳を込めて扱えず、子を捜す」と病院や避難所を回った。「手をつないで避難していた夫婦の妻だけが流された」「逃げる車で道が渋滞し、濁流がのみ込んだ」。悲劇が町じゅうを覆っていた。

命伝える難しさ実感

地元の自治体や住民はどんなにつらい思いをしているだろうか。

津波は多くの被災者を「行方不明」にした。自宅が全壊し、長男が見つからない男性助のボートに乗るのを怖がったという。水に襲われた記憶が鮮明に残っていたからだ。

隊員はボートに畳を敷き、お年寄りをいすに座らせ、両脇から二人で抱えて搬送した。女性が「寒い、寒い」と隊員の迷彩服を握り締める姿を見て、津波の恐怖が伝わった。後に、この施設では今回、数十人が命を落とすと知った。

無事だった被災者からは心の傷を感じた。一階が水没した老人ホームから自衛隊が五十人のお年寄りを救出した。その際、多くが救さ、家族の悲しみを伝えることが、社会全体に支援の機運を高め、一刻も早い救援につながると考えていた。しかし、地震直後に死亡が確認された人はごくわずか。生存は難しい状況に見えても、家族は無事を信じていた。死を連想させるような取材はつつしんだ。名取市では千人が行方不明のままだ。その一人一人が明らかになるまで被災は終わらない。

失われた命の無念

被災者と向き合う

小笠原寛明

現場に足を踏み入れた者がおそらく一度は口にしただろう。まるで戦場だと。被災地にはあるいは配慮に欠く表現かもしれない。だがそんな言葉が漏れたのも、「震災」という言葉の概念をはるかに超えた惨状が目の前に広がっていたからだ。

震災直後の十一日午後、空路で現場を目指した。海岸線を北上しながら目を疑った。日本地図が塗り替えられたかのように陸地がえぐり取られていた。

当初、目指した宮城は空港が水につかり、福島から陸路で現場を目指した。幹線道路の国道4号は大渋滞で、山道を一晩かけて仙台市若林区に入った。空からは確認できなかった遺体が横たわり、かたわらで遺族が立ちつくしていた。美田が広がっていたという地区は泥の海と化していた。

どこまでも痛ましい情景を前にして何を書くべきか。見て、聞いたことをただ書き連ねるしかできなかった。「その時、あなたは何を見たのか」「津波はあなたから何を奪ったのか」。つたない問いを繰り返すしかなかった。

その後、岩手県陸前高田市に入った。内陸に向けて廃虚の山が五、六キロも延びていた。現地の情報はほぼ皆無。通信手段は絶たれ、がれきが行く手を阻んだ。屋外に人影はほとんどなく、難を逃れた人々は高台の中学校で肩を寄せ合っていた。安否を知らせる掲示板に見入る人たちの思いを尋ねた。

震災六日後に帰名し、後続の記者と交代した。各自治体同様、名古屋でも被災者の受け入れが始まっているが、着の身着のままで逃れてきた被災者への公的支援は貧弱だ。

未曽有の大災害に、メディアによっては「国家の危機」といった大上段な論調も目につく。だが、現場記者が向き合うべきは目に見えない国家ではない。愛する人や人生をかけて積み重ねた仕事や財産を一瞬に奪われ、それでも今を生き抜かねばならない目の前の人々だ。彼らの生き方を紙面に刻むことこそ、務めだと考えている。

消えた命と暮らし

中崎　裕

地震直後の現場を訪れるのは、三度目だった。二〇〇七年の能登半島地震と新潟県中越沖地震では、お年寄りなど要支援者の避難や被災者の健康問題など各地で同じ課題に直面した。教訓を一つの基点に取材しようとの思いもあったが、あまりの被害に何を書けばいいのか戸惑い、悩んだ。

地震の翌日未明に宮城県入りし、三日目に気仙沼市の鹿折（しかおり）地区にたどりついた。電車のトンネルを歩いて抜けると、がれきとヘドロの世界が見渡す限り広がっていた。

あちらこちらで白煙が上がり、焦げ臭さとヘドロのにおい、何か酸っぱい刺激臭が鼻の奥をついた。崩れた家の横に巨大な船があるが、海は見えない。

ヘドロとがれきの中をさまよい歩いた。ピアノ、ベッド、ラブレター。あらゆるものの力を知った。圧倒的な現実を伝えられるかという不安にかられつつ、「まずこれを伝えなくては」との使命感のような考えが頭を埋め尽くした。

避難所では行く先々で「食料はいつ届くんですか」「あの学校は無事ですか」と質問攻めにあった。ある男性は「窮状を知らせる方法がない。伝えてください」と涙を流して訴えてきた。通信手段すら確保できない市役所は、物資の出入りも掌握しきれない混乱状態だった。

被災者が何に苦しみ何を求めているか伝えること。それが読者に支援と備えを考えてもらうことにつながると信じて書いた。ただ、当初考えたような過去の教訓を生かすための記事を書くには至らなかった。被災地を離れた今、エコノミークラス症候群やトイレの衛生問題など想定された二次被害が次々と出ている。何を書くべきだったのか、どれだけ役に立てたのか。自問を繰り返している。

役に立てたのか自問

現地以外へ伝える

中村禎一郎

白い雪が手の中で溶けて、黒い水がしたたった。宮城県石巻市の避難所に取材に行った時だったと思う。高齢の男性たちが、残っている雪を拾い上げて手の中に握り、たき火で温めて手を洗っていた。手を洗う水さえ被災地にはなかった。

震災発生当初、食べ物が行き渡っていない避難所が多かった。「みんな何も食べてないのに、持っていたおにぎりを自分だけ食べていた若者がいる」。被災者からそんな陰口が出ていた。

震災翌日に被災地に入った。絶句するような光景が次々と目に飛び込んでくる。「とにかく、目の前で起こっていることを書かなければいけない」と感じた。ただ、東北地方で発行していない本紙の記事は被災者の役に立つわけでなく、元気づけるわけでもない。そんなことも思いながらも、できることは被災地以外の人々に伝えることだけだった。

通信状況が悪くて新聞もテレビも十分に見られない環境の中で、震災がどう伝えられているのか、現地にいて全体像がほとんど分からなかった。書いても書いても、現場の惨状や被災者の声が全く伝わっていないような気がしていた。

帰名後、名古屋大で開かれた東日本大震災の公開討論会ではっとさせられたことがある。NHK元記者で名古屋大減災連携研究センターの隈本邦彦客員教授の言葉だった。「実は地震発生後に報道ができることは少ない。発生前にいかに報道するかが重要」

地震の規模が想定外だったことは間違いないが、振り返ってみれば、避難所に食べ物や水がなかったのは、それだけの準備がしてなかったからではないか。

東海地方は近い将来、東海、東南海、南海の三連動地震に襲われる可能性もある。起きてしまった東日本大震災の被災者を少なくすることはもうできないが、三連動地震の被害を減らすことはできるかもしれない。東北地方の惨劇を報道することで、将来の想定外を少しでも少なくできると信じたい。

将来の被害減らすために

㊤津波で大破した住宅の壁に残された伝言
㊦津波に押し流された住宅の跡地で、ヘドロに埋もれかけた家族写真

水たまりを漂う本と人形＝いずれも３月26日、宮城県石巻市で（安藤明夫撮影）

お断り　シリーズ「わが家を強く」は休載しました。

© 中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています。